

# 第691号 ヤスクニ通信 2012年8月12日

## 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会

<祈りのために>

主はまた言われた、「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを、つぶさに見、…  
叫びを聞いた。苦しみを知っている」

出エジプト記3章7節

ヨセフを知らない王の出現でこれまでのイスラエル人への政策が変わります。その苦役の務めの故にうめき、叫びを神に訴え助けを求めます。いつの時代も捕囚の身は政権の如何にかかわらず悲しい身であります。それは当時だけではありません。

1609年薩摩の侵略、1879年明治政府による武力併合(琉球処分)、1952年日本の独立と引き替えてアメリカ軍事占領(植民地支配)、1972年祖国復帰(第二次琉球処分)。薩摩の世(支配)から、ヤマト(日本)の世(支配)へ、ヤマトの世からアメリカ世(支配)へ、アメリカ世(支配)からヤマト世へと、ネコの目のようにくると、人間を神とする国の肉欲のために時代が変わるたびに翻弄されてきた沖縄(琉球)、反対に己の戦争責任回避のために沖縄を25年から50年使用を提起した人物が国の象徴です。1952年講和条約第3条によって沖縄は切り捨てられ、独立後、日本は朝鮮戦争の軍需景気で繁栄する。戦争の責任のつけはすべて沖縄に回されました。

そして今また辺野古に新基地が建設されようとして、更には県民の命と財産を無視した危険なオスプレイをなにが何でも強行配備をすると県民を恫喝する。配備反対にこの炎天下基地の前で座り込みが続いている悲しい現実、未だ沖縄の戦後は終わらず涙が止まらぬ日々で、ああ、主よ「いつまでですか」と呻きが絶えない戦後67年です。

沖縄戦で二人の息子と娘、母と弟を失った大山朝常氏は、平和憲法の下に、人権が守られる祖国へと復帰運動を熱心にした。しかし彼曰く「ヤマトは帰るべき祖国ではなかった」と、遺言として「沖縄独立宣言書」を残して去った。

平和は大事、抑止力は必要、基地は必要と言いながら基地負担を平等に担えというそれはご免だと、国土の0.6%にすぎない沖縄に74%の米軍基地を押しつけて平和を謳歌する醜い日本人の姿が構造的沖縄差別として露呈し続けているのが沖縄であり、その根が沖縄の民の悲しみ、呻きであります。ここに神が立っておられるなら、この民の声を聞いてくださって、今に至るまで沖縄の人権を蹂躪している日本とアメリカに、神の裁きの声が鳴りとどろいているのではないかと、毎日思っているほどです。

祈り

主なる神よ。イスラエルの呻きを苦しみを聞き挙げましたように沖縄の呻きを聞き上げてください。

島田善次(宜野湾告白伝道所牧師、九州中会ヤスクニ問題委員長)

## 私にとっての反ヤスクニ教会闘争（1）

鈴木康之（東京中会教師）

私がこの問題に着手した個人的経緯を遡ると、教会に通い始めた契機となった聖書の御言葉にあったと回顧する。平和憲法問題に携わりつつ地域のヤスクニ的課題を抱え、金目教会で牧師として務め、そして神社参拝を強要されたにも拘らずそれを退けた韓国教会の信仰に関する研究をしている目下の留学生活も、初めに聴いた御言葉と関わっている。

最初に刻み付けられた御言葉、それはマタイ福音書5章39節である。殴られればなし、そんなことが果たして出来るのかという素朴な疑問から、**高校2年生の1991年**、教会に足を運ぶようになった。以来、聖書が生活の規範となっていく、この御言葉の内実を示す三つの事柄にも触れることとなった。一つは使徒の勧め（ローマ人への手紙12章19節）であるキリストの御体の一部としての復讐の禁止、次は南ユダ王国亡国の危難、バビロンへの強制連行（哀歌3章30-33節）にあたり、御神への信頼に基づき裁きを素直に受ける民の姿、三つ目はノアに契約を施そうとなさる直前に示された御言葉（創世記9章5節）、ノアの時代に起こった大洪水の後、はっきりと御神御自身で打ち立てなされた真理である。以上この三つは、主の十字架と復活、昇天そして着座と堅く結びついていることは言を待たない。ここにあるのは報復権の所持者は誰か、という問いかけである。

報復権を所持しているのは聖書が教える御神のみであり、人間はその権限を放棄する。ここにある報復権放棄こそは、報復も「必要悪」・「是」、甚だしきに至っては「義」とさえしかねない勢いに歯止めをかける。仲保者の御前では報復を考えて生活することは教会の道ではない、キリスト者のそれではない。報復の権能は私たちには無い。他のどんな宗教団体にも認められていない。当然国家にも無い。報復の論理は戦争開始の合理化の常套手段だが、実はそれは何の妥当性もないということを教会は世に示す必要がある。

教会の歴史を想う。もし報復権を完全に放棄した旧日本基督教会であったなら、戦争国家の支配に甘んじて天皇を神とし、戦争に加担し韓国教会に神社参拝を強要し、日本基督教団作りに参与したであろうか。この無明は教会と国家との共同制作品である。

この無明は、戦後の日本の政治が67年に渡って報復を惹起するための闇を、一層深めている。いまだに一部の指導者はその暗がりの中で見えるはずもない敵を、あたかもそれが今まさに迫っているかのように見せ、国民を恐怖させる。靖国神社は仮想敵に対抗して打ち負かすための、やる気を起こさせる格好の道具だ。このようにして、無明は人の心を暗くし続ける。しかし私たちは、教会の主体性に基づく信仰告白事項を捉えた時から、その無明から決別し始めた。無明国家下にあって、そこからの自律をした、それが私たち日本キリスト教会だ、と私は考えている。靖国神社問題特別委員設置の1969年の教会決議は、過去の無明の闇とは異なり、いわばそれは聡明の夜明けだ。

実際に、私がこの明るみに接触し始めたのは神学生時代、1999年沖縄県の辺野古の海岸の米軍基地建設抵抗運動に加わってからである。以来、なぜ反ヤスクニ教会闘争を私がするのかを、否応無く理由を求め始めた。個人的な思索の回路は多角的でその分答えはまちまちになるが、総じて答えは全く明白である。中心は先述の1969年大会決議の故である。

この事実の開き示すところは大きい。声は小さくても、叫びの内容は世々の教会の叫びに呼応している。「キリストだけが主である」という告白の下の結集だからである。国家が教会の主権への侵害をした時、私たちは結集する。この結集は社会運動体の様相を呈し

ているので、教会がやるべきことではないという誤解が悶々としてある。それは避けられない。種々の教会の実像があるからだ。しかしかの決定に立ち返って、そこから発言し始めたことを踏まえるなら、誤解を持たなくなる。なぜ教会は国家の反体制の側に立つのか、そのわだかまりが解ける。それほどに意義深く奥深い決定を、私たちの教会はしたのだ。

1967年から数えると、2017年は反ヤスクニ教会闘争の50年に当たる。この年を迎えたなら、一つの節目として歴史編纂が求められる。しかしもっと求められることは、かき氷を食べながらクーラーを前に涼みつつその年を迎えて備えるようなことではなく、本件の終結のため結集して闘い続けることこそが重要である。結集をより実質的にする提言が私にはある。旧日基の伝統を継承している以上、私たちはいまだに天皇を神としたことの罪を告白していない。それを大会で協議して決議することである（続）。

## 〈ヤスクニ・ニュース〉

### 靖国合祀訴訟、最高裁が遺族の上告を棄却

沖縄戦で肉親を亡くした遺族5人は、靖国神社に無断で合祀している靖国神社に合祀取り消しと損害賠償を求めた。最高裁第二小法廷は「上告理由は事実誤認や法令違反を主張するもので、上告事案に該当しない」（6月13日）と棄却した。原告の沖縄靖国合祀ガッテンナラン訴訟団と弁護団は、14日、「果たすべき役割を放棄し続ける最高裁に強く抗議する。沖縄戦の被害者を加害者である日本軍側に取り込むことは許されない上に、無断で合祀したことは追悼の自由を侵害している。国が一宗教法人である靖国神社に戦没者の情報を提供し、合祀に協力したのは政教分離違反である。私たちは最高裁判断に決してたじろがない。今後も国政や司法の不正義・不当な行為に対して民主権の旗を高く掲げ、不退転の決意を持って臨み、靖国の本質をあばく。沖縄戦の実相を司法が法の名の下での圧殺の暴挙であることを、万感の怒りを込めて抗議する」と声明した。（琉球新報6月15日）

### 抗日戦争記念館の日本人客、年々減少

中国人民抗日戦争記念館(北京)の李宗遠副館長は、7月2日、中日国交正常化40周年を機に、「抗日戦争記念館を訪問する日本人客の数が両国の政治関係の影響を受け、年々減少している。抗日戦争記念館は1987年7月7日に一般開放されて25年を経た。その間、政治家から一般国民の多くの日本人参観者が訪れた。毎年1~2万人の日本人参観者が訪れていた。しかしその後年々減少して。現在は年に1~2千人程度。小泉氏の靖国神社参拝が、当館の日本人参観者数の分岐点となった。北京から中国に入国している日本人の数は毎年比較的多いのに、当館を訪れる日本人の数は反比例する形で減少している。この問題には、政治関係が民間交流に影響を及ぼしている」と指摘した。（人民網日本語版7月4日）

### 戦争を語り継ぐ輪が拡大

戦争体験者が減り続ける中、京都府内で「京都平和遺族会」の会員数が増え、特攻隊や空襲、引き揚げなど、さまざまな「過去」と向き合う場として関心を集めている。平和遺族会は「再び戦没者と遺族をつくらない」との願いの下、1991年7月、府内に住む10人が結成。会員は30人前後で推移していたが、戦後60年を迎えた2005年前後から増え続け、現在は74人。遺族同士の交流会を開き、夏の戦争展や年2回の講演会を行う。戦争体

験を聞く機会を大切に、2月に元特攻隊員の講演の時、会場が満席になった。遺族の多くは、自らの人生に影響した戦争の本質を問いつつ、次世代に平和の願いを託したいという。代表世話人らは、「会の存在意義が薄れるどころか、一層役割が増し、未来につながる活動を続けたい」と語っている。連絡先、TEL. 0771(62)1263

### <集会案内>

1. 「日本支配下の沖縄」～40年を顧みて～ 講師 渡辺信夫（東京告白教会教師） 8月9日（木）午後1時半 烏山区民センター3階集会室（京王線千歳烏山駅下車徒歩1分）生涯のほとんどを沖縄との関わりの中で生きてこられた講師による渾身の沖縄講演  
主催 日本キリスト教会東京告白教会
2. 平和祈禱会：8月15日午前7時 千鳥が淵戦没者墓苑
3. 第39回 許すな!靖国国営化 8.15 東京集会 演題:平和憲法と脱原発/反核～戦後最大の危機を迎えて 8月15日（水）午前10時～12時（開場 9:30）在日本韓国 YMCA アジア青少年センタースペースワイホール(地下)JR 水道橋駅、御茶ノ水駅、地下鉄神保町駅  
講師：高田 健（許すな！憲法改悪・市民連絡会）等主事。主催：8.15 東京集会実行委員会 後援：日本キリスト教協議会(NCC)靖国神社問題委員会

### <靖国委員会からの報告>

1. 2011年10月靖国全国協議会の講演録「信仰の先輩たちの戦争期の生き方から学ぶ」（講師 石浜みかる）550部を、全国の教会に配布しましたが、新たな購入希望があるために、500冊を増刷して、一冊250円（+送料実費）で販売することにしました。ご希望の方は、尾谷則昭（大会靖国委員）メール：[laxodani@aol.com](mailto:laxodani@aol.com) 〒120-0024 東京都足立区千住関屋町10-14-502 電話/FAX：03-3870-2488 に注文してください。この講演録が教会の読書会などで用いられ、信仰の生き方の新しい発見となるよう祈ります。
2. 2012年度靖国神社問題全国協議会《パネルディスカッション》  
2012年10月9日（火） 18：30～20：40 日本キリスト教会大阪北教会礼拝堂  
「日本キリスト教会50年史」を読む…「靖国神社問題への取り組み」はどう記述されたか  
《パネリスト/担当年代》  
鈴木和哉（1916～1951年） 齋藤修（1951～1969年） 古賀清敬（1969～1984年）  
上西創造（1985～2000年） 司会：尾谷則昭（靖国神社問題特別委員会）

### <訂正とお詫び>

「ヤスクニ通信7月号」の第二面、「ヤスクニ問題とわたしそして日本キリスト教会」渡辺鈴女（無任所教師）先生の文章に誤植がありました。

2頁の下から14行目「1967年7月の臨時大会」を「1969年7月の臨時大会」に、その下の行の「第17大会」を「第19大会」に、3頁の終わりから3行「日本キリスト教会でも戦後50年の第40回大会」を「戦後50年の罪責告白は、大会靖国委員長の名で」に訂正いたします。

編集部からお詫びをいたします。

691号 ヤスクニ通信 2012年8月12日 発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会 発行人 加藤正勝 編集人 川越弘 印刷・発行 栗田英昭（多摩ニュータウン 永山伝道所）〒206-0025 東京都多摩市永山 1-16-11 TEL&FAX 042-376-9514
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------